

霜 月 立冬の聲を聞かばこそ、頻々と降る

時雨に、紅葉は碧潭に映じて、“からくれなゐに水くまるとは”と、古歌の綾錦を織りなす晩秋の景。幽玄の味を尋ねて分け入る深山幽谷も、陽は山蔭にさへぎられ、早くも暮色迫る。冷氣の身にしむ寂中聲有り。“伐木丁丁山更幽”。げにや古仙奥底の境か。

1939年

11月の天象

太陽 “天秤”座を通つて“蝸座”の北端を過ぎて、月末一寸“蛇遣ひ”に入る。太陽が十二宮にない星座に入るのは先づ此の邊りだけだらう。

日付	赤緯	赤緯	晝間	夜間	薄明終焉時刻
月 日	h m s		時間 分	時間 分	時 分
11 1	14 23 7	-13°54'	10 45	13 15	18 28
6	42 49	-15 29	10 37	13 23	18 25
11	15 2 53	-16 58	10 28	13 32	18 22
16	23 18	-18 35	10 19	13 41	18 18
21	44 4	-19 47	10 12	13 48	18 17
26	16 5 9	-20 49	10 5	13 55	18 16
30	22 15	-21 33	9 59	14 1	18 15

氣候はいよいよ晩秋へ移る。寒氣は追々と増して来る。でもどうかすると、ポツカリとした小春日和を迎へる事がある。日没は益々早く、月末は殆んど年中で最も日暮れの早い頃と云つてもよい。

月 “牡牛”座に始まり、例の如く一週りする。諸相を表示すれば

日付	月齢(21時)	時刻	視直径	星座	記事
4 ^{II}	22.6	22 ^時	32' 13"	蟹	下弦
8	26.6	6	32 33	獅子	最近
11	0.1	17	31 56	天秤	新月
19	8.1	8	29 36	水瓶	上弦
20	9.1	4	29 32	水瓶	最遠
27	16.1	7	31 36	牛	満月

水星 先月來次第に太陽から遠ざかつて居たこの星は8日夕刻の最大離角に達し、以後再び太陽に近づき28日には内合する。上旬西空低く見られる。

金星 漸く太陽から可なり離れて來た。何分明るい星だから、夕空低く肉眼

に映ずる。但し未だ望遠鏡を向けるには低すぎやう。

火星 いよいよ急速に遠のいて来た。光度は -0.4 から $+0.0$ へ、視直径も $11''.6$ から $9''.1$ へと減少、もう可なりの器械でも観測は困難である。

木星 少し西へ歩を運んだが未だ見頃である。光度は -2.4 から -2.3 、視直径は $44''.5$ から $41''$ へと減少中ではあるが、もともと大きいからさして差支へない。

土星 目下對衝を過ぎて、最も見頃である。光度は $+0.1$ から $+0.2$ 、視直径は $18''.8$ から $18''.5$ 、輪の傾きは 14° 弱。5cm の50倍にも美しい。カシニ溝は10cm 150×で見られる様になつた。

天王星 11月13日對衝となる。光度は $+5.9$ 、視直径は $3''.7$ 。少々張台ひないが見頃である。10cm 150×で圓盤線に辛じて見へる。

海王星 暁天の星。少し太陽から離れた。

流星 有名な獅子座群、今年は暗夜で好都合だ。

黃道光 朝の姿は素晴らしい。いつも獅子座流星を見乍ら、其の尖端が、獅子座から蟹座まで達して居るのに驚く程だ。しかも明るい。

ユリウス日 11月1日21時が2429568.0に當る。

恒星界 太陽系を離れて更に進む。白い銀河は西に低き、琴、白鳥、鶯等の夏の星座は哀れを西空に留めて居る。中天にはペガソスも既に傾き、アンドロメダ、カシオペヤが懸つて居る。ベルセウスや馱者の姿も高くなつた。南天には、水瓶や鯨や魚が淋しい。東天にはもう“昴”がキラキラと一握りの銀砂を思はせ、其の右手のヒアデスの目玉はアルデハランだ。そして其の下には長く待つて居たオリオンが漸く東の地平線を破つて来た。大陸はもう寒波に包まれて来たが、夜空の景觀はいよいよ美を増す。この邊りの星座の姿は何時も自分を少年の頃に引き戻す。其の頃から凡ゆる現實の中を泳いで、漸く人に成らうとして居る自分を照して居る様に思はれる。肯定と否定の中に現實の姿を見直す必要があるのではないか。悠久は又一瞬でもある。駟筆を走らせた罪の軽くない事を詫びつつ、拙稿を御愛讀下さつた會員諸氏に謝して、新しい構想を求むべく一應擱筆しやう。

彗星アルゴルの極小光度の日 十一月3日0時、5日21時、23日2時、25日23時、28日20時。
(木邊記)